2023 年 2 月 28 日発行

感謝箱献金だより

ガリラヤのほとり 39 号

北海道教区主教
マリア・グレイス笹森田鶴

日本聖公会婦人会に連なる皆さまが継続されている感謝箱献金の活動が、１８９２年から続き、大切にされながら今年１３１年目を迎えると伺いました。１３１年という時の長さを想像いたしますと、どれ程の祈りと感謝の思いが感謝箱献金の小さなひとつひとつの箱に込められてきたことかと心震える思いになります。そしてこの直近の３年間、私たちの行動に制限を定めなければならなかったコロナ禍においても、途切れることなくこの感謝箱献金の活動が継続されてきたことに心からの敬意を表します。私たちの祈りと感謝を神に献げるという人間としての根本的な行為は、どのような事態になっても誰も止めることはできないということを、日本聖公会婦人会に連なる皆さんがはっきりと証ししてくださいました。しかも、誰かに会うことや直接出会うことが非常に難しい状況や経済的な格差が世界規模で拡大し、貧しい人々がさらに貧しさを負い、予防や治療へのアプローチから遠いところにある現実の只中にあっても、コロナ禍による行動制限をあっさりと飛び越えて、日本各地で、また世界各地で婦人会の方々が出会った方々へと確かに届けられています。ひとり一人の祈りをもった行動は、決して小さいものではないことを証ししたのです。

日本聖公会婦人会の皆さまに祈られ、またお支えいただき、昨年春から北海道教区に参りまして、初めての北海道での冬を迎えています。２月は最も札幌も寒い時期となります。そのような中、北海道教区婦人会では、この感謝箱献金によって教区内で集められたお献げを次のような団体にもお送りしております。自立支援ベトサダ、アハリーアラブ病院、とよひら食堂（お弁当分かち合いプロジェクト）、札幌キリスト教会「金曜ランチ」、ファミリーホーム「のあ」の各団体です。この内３つの団体が北海道内での活動です。「金曜ランチ」は、北海道大学の隣にある札幌キリスト教会で、留学生などを対象として、お弁当、食品、また生活用品などをお渡ししている活動で、50～60 名前後の方々が利用されています。また、ファミリーハウス「のあ」は、なんらかの理由で家庭での養育が難しい状況にある子どもたちを、里親として経験豊かな養育者がその家庭に迎え入れて養育する「家庭養護」の活動で、現在 5 名の子どもたちが里親である信徒の方とともに網走で暮らしています。

感謝箱献金の活動を知れば知るほど、このような各教区婦人会の独自のお献げも含め、どれも尊いものであり、必要なものであることを知ります。感謝箱献金の各地にあるお献げ先の活動は、コロナ禍や世界各地の紛争・戦争の激化も相まって、まだまだ苦しい状況が続いていくことでしょう。けれども感謝箱献金の活動を通して、祈りと感謝の思いを伝え、それぞれの活動を支援していくことは一層重要な営みとなっていきます。感謝箱献金の活動が必要なくなる、み国が実現するその日を目指して、皆さまと祈りを合わせて参りたいと願います。感謝箱献金をはじめ、日本聖公会婦人会のお働きとそこに連なるすべての方々の上に、神様の導きと祝福が豊かにありますように祈ります。

お献げ先の近況報告から

リグリマ・ジャパン

新型コロナ感染症とガロの女性

バングラデシュでは新型コロナ感染症の影響で失業し、生活が立ち行かなくなった人びとが多くいます。特にガロの女性たちはその影響を強く受けています。なぜなら、ダッカに出稼ぎに来たガロの女性たちの多くが、美容師、家事使用人、看護師という、ソーシャルディスタンスのとれない職業に就いているからです。そのため、感染症に何度もかかったり、失業したりしました。ガロの女性がそれら 3 つの職種に就くようになった経緯を少しお話しておきます。

1890 年代半ばから国内産業の発展や中間層の台頭などによって都市労働力の需要が増し、ガロの女性たちはおもに美容師、家事使用人、看護師として働くようになりました。美容師に関しては、バングラデシュにおける美容産業の草創期に、美容院の経営者であった中国人女性が、自分たちに容姿の似ているガロ女性を雇いはじめたことが就労の始まりでした。

家事使用人に関しては、欧米豪の在留外国人がクリスチャンであるガロ女性を雇うことを好み、「素直・正直・勤勉」な働きぶりが評判を呼んで、さらなる雇用を生みました。看護師に関しては、ムスリムやヒンドゥーの女性たちが＊パルダ規範や穢れの観点から身体的接触を忌避したことから、クリスチャンであるガロ女性が看護職の需要を埋めるようになりました。

ガロの人びとはバングラデシュでは民族的にも宗教的にも少数派でもあるため、社会の周縁に位置づけられていますが、皮肉なことに、とりわけ美容師、家事使用人、看護師の就労に関しては、「ガロであること」や「クリスチャンであること」が有利に働いて、比較的安定した仕事につくことができています。ただし、それらの就労が再度、民族や宗教と結びつけられて社会的な周縁性をさらに固定化する可能性がないとは言い切れません。ガロ女性の主要な 3 職種は、このような「きわめて限られた選択」ではありますが、同時に低所得層出身のガロ女性にとっては、村に送金できる貴重な収入源となっていることは確かです。

＊パルダ規範：南アジアを中心とした地域で行われている、女性を社会から隔離する風習や制度。

リグリマ通信第 29 号の記事より

リグリマ・ジャパン代表の上澤伸子さんが 12 月 2 日～5 日、バングラデシュのダッカを訪問し、現地ディレクターのラブリーさんと面会しました。ダッカではコロナの感染者が減少していて、誰もマスクをしていないそうです。メンバーが住む北部地域は今年、田畑の冠水と日照りの両方に見舞われましたが、日照りの後に多少雨が降った時に田植えを済ませ、これから稲刈りができるだろうということです。

ダッカガロ教会の礼拝

「聖地ろうあ子どもの里」(HLID)

「聖地ろうあ子どもの里」施設長ルウエイ・ハダッド司祭の突然の死

2022年7月、「聖地ろうあ子どもの里」施設長ルウエイ司祭が急逝。糖尿病を患っていたということですが、全く予期しない出来事でした。

3年前、ブラザー・アンドリュー施設長が事故で不慮の死を遂げた後、聖公会の司祭ルウエイ師が HLID 施設長に就任。彼は生徒たちや教職員たちを大事にし、生徒全員の名前を覚え、家庭環境や学校での振る舞い、性格などをよく調べて、一人ひとりの生徒に話しかけ、「いと小さくされた人たち」に気を配っていました。新型コロナ感染症の流行で学校が休校になった時にも、教職員には手当をきちんと支払うなど、困難な時にも学校運営に手腕を発揮し、財政を安定させました。

後任の施設長にジャミール・ハデイール司祭が就任

2022 年 9 月、エルサレムの主教座聖堂に勤務していたジャミール・ハデイール司祭が後任の施設長に就任。ジャミール司祭は 2015～ 2017 年まで HLID で働いたことがあり、校内ではよく知られています。手話を自由に使い、教職員たちとも良い関係をもち、海外からのボランティアたちとも面識があります。わたし（吉松）はボランテイアで HLID に行き、ジャミール執事（当時）に会ったことがあります。夕食後、食堂の片隅で、生徒たちの宿題の面倒を見ていたことを覚えています。

ホッサム・ナオウム聖公会エルサレム教区主教、卒業式に参列

5月には卒業式が行われ、聖公会エルサレム教区主教が参列して、卒業生たちを祝福しました。HLID は教区の宣教拠点の一つです。

職業訓練生 4 名と高校課程を終えた 5 人が卒業。卒業生の中には、大学へ進学し、学位を取る人もいます。また、ここに来てから十数年になる盲聾唖三重苦のモハンマドさんが晴れて卒業証書を授与され、卒業後は、HLID のスタッフとして残ることになりました。卒業式を記念して、主教は各国からの支援に感謝する銘板を「聖地ろうあ子どもの里」に贈りました。

HLID はコロナ禍のため、休校したこともあったが、2022 年夏現在、活動を順調に再開しています。ジョフエ（Jofeh）とクレイマー（Kreimeh）の地域センターでは、困難な状況下にありながら、授業と手芸品制作その他の作業は続いています。本校の授業や職業訓練所の活動も、卒業後の社会生活に備えて通常通りに行われています。

2022 年 9 月のニュースレターより

訳 「聖地ろうあ子どもの里」子供を守る会・日本

東京教区　聖オルバン教会　吉松英美

サイディアフラハ

「コロナとその後の世界的不況、円安、そして私、荒川が 大病したために働けなくなった。ケニアで子ども支援活動を始めて 30 年で最大の財政的危機を乗り越え、これからも子どもたちの未来を切り開きたい」

との思いから昨年末より 90 日間クラウドファンディング（インターネットを介して不特定多数の人々から少額ずつ資金を調達する）を実施。目標額を達成された。

使用目的は施設の中高生の学費 1 年分、運営費の補填等です。

Facebook から

・サイディア小学校低学年の児童たち。2022 年 3 学期の成績は 2 学期と比べて平均で 70%アップ！』これは「先生による英語絵本読み聞かせ」を 1 週間に 3 回、この 10 月からしてもらっているためのようです。

この世代は絵を描かせても独創的かつ想像力豊かです。

・ケニア政府は全国的な中学校の始まりを 1 月 30 日からとしていたがそれが遅れて、2 月 6 日から始まった。中学は教科が多く先生も多くなるので、サイディアフラアハのような私立は授業料を増加。私は「これでは生徒が集まらないのでは」と危ぶんだが、それが的中。 5 名しか集まっていない … **代表　荒川勝巳**

（Facebook から一部抜粋させていただきました）

昨年荒川さんはヘルニアの治療のため 4 か月帰国されましたが、すっかりお元気になられました

月に一度のオンラインツアーも続いています。新しい事に挑戦している サイディアフラハです！

地域支援団体　釜石支援センター望

12/13 只越３号復興住宅
「お茶っこ＋クリスマスビーズ作り」

釜石支援センター望から、毎月『望ニュース』が届きます。月ごとのプログラムの日時や場所などが載っています。センターの活動支援箇所は 20 カ所ですが、新型コロナウィルスの感染急拡大の影響で、実際に開催されるのは 7~9 カ所。活動停止期間が長引くことで、コミュニティのつながりが薄れ、参加者もボランティアも減少。また、地元ボランティアの高齢化、サロンの担い手不足。団体運営に関する資金不足も心配されています。

また、「各復興住宅の自主活動事情」が連載され、イベントや定期的なラジオ体操、お茶っこ会、カラオケや手芸など、それぞれに楽しんでおられるようすも紹介。

『支援センターは材料の提供やお茶やコーヒーの支援を行い穏やかにお支えしています。』

難キ連（難民・移住労働者キリスト教連絡会）と学習支援

新型コロナウィルスの影響により、現在はオンライン授業を取り入れながら、NCC のフリースペースで教室を開いており、小学 3 年生から高校 3 年生まで、継続的に通っている約 10 名の子どもに向けて、ニーズに合わせた個別指導を行なっています。

生まれも育ちも日本である子どもが、大人になって来日した保護者に、日本語で学校の勉強や進路について家庭内で気軽に相談することは困難です。このような子どもに、難民について自ら学び活動している学生たちが先生となって勉強を教えています。

在日難民二世の子どもたちにとって、学生と関わることは、日々の生活のことや大学で勉強していることを聞く機会となり、子どもが日本社会で生きて行くことの具体的なイメージとなります。一方で難民問題に興味をもち主体的に活動をしている学生にとっても、記号的な「難民」ではなく、これからの日本生活に共に生きる一員として彼らと関係を紡いでいく場ともなっています。

『難キ連 NEWSLETTER（2022.5.16）』

聖公会生野センター

聖公会生野センターは、1992 年に在日韓国・朝鮮人が多く暮らす大阪生野で、「地域と共に歩むことを願い」というスローガンの下、歩み始めました。2005 年 3 月に特定非営利活動法人（NPO 法人）となり、多くの方々のご支援やお祈りの中で、今年設立 30 周年を迎えることができて感謝です。

事前に生野センターの 30 年の歩みや働きを知り、学ぶ機会として日韓聖公会の歴史も含めて、4 回にわたり連続セミナーが催されました。そして 10 月 10 日には大韓聖公会や各教区からお迎えした主教様をはじめ多くの方々とともに「聖公会生野センター30 周年記念感謝礼拝」をおささげすることが出来ました。礼拝後にはゆかりのある皆さまによるパネルディスカッションが開催されました。今までの歩みを振りかえり、設立の頃を知らない若い方々やセンターの働きをご存知ない方々にも改めて目をとめて頂く機会になったと思います。

生野センターの働きは、一言で表すと「地域が必要とすることをする」と言えます。小さな声を大切にして、行政や他の団体ではカバーできていない事柄に目を向けて活動を続けてきました。

「のりばん」は在日一世、二世の方々が集まり昼食を共にし、語りあえる場所です。初めて参加しても仲間にすーっと入れて頂けます。今回「のりばん」で提供されている食事のレシピ本が作成され、記念感謝礼拝にて配布されました。

「クリン もだん美術教室」は、「美術教室に入れてやりたいが障がいを持っていることで受け入れてくれるところがない」との声から「誰でも参加できる美術教室」として始まりました。この働きはデイサービスへと続き、デイサービスには多様な人が集うようになりました。また、「土日の行き場所がない」の声があがり、生野センターのデイサービスは土日も開所するようになりました。

この度、設立 30 周年にあたり、新事業として高齢者、障がい者の生活介護事業を立ち上げ、今後に向けて新しい歩みを開始しようとしています。生野センターの働き手も財政も決して豊かではありません。皆様のご支援によって支えられています。どうぞ、これからも聖公会生野センターの働きに関心をもって、これらの働きのために祈って頂きたいと願っています。

大阪教区婦人会　加納佳世子

国際子ども学校（ELCC）

国際子ども学校（以下 ELCC）は、基本的には幼児から義務教育年齢の子どもたちを対象にしていますが、必要と考えられる場合はそれ以上の年齢でも受け入れています。2022 年度（1～12 月）は 4 才から 16 才の子ども 18 名が在籍しました。

これまで同様に、フィリピンにルーツをもつ子どもたちのための学校として活動を行っていきたいと考えています。子どもたち一人ひとりの事情を考慮し、彼らがもつ問題や困難を解決しながら、味方として共にいる存在であり続けなくてはならないと考えます。

日本の政策による外国人労働者受け入れ拡大等により、今後、外国にルーツをもつ子どもたちが増加することは必至で、事情の多様化も懸念されます。在留資格のあるなしに関わらず、どのような状況にあっても ELCC を必要とする子どもを受け入れ、子どもたち一人ひとりの必要を満たしていきたいです。

殊に、2023 年 4 月より新たに、日本の中学校卒業（15 才）以上で成人に満たない年齢で来日した若者のためのクラスを開設します。フィリピンでは小学校卒業後は 4 年制の Junior High School に通います。15 才（高 1 年齢）で来日した場合は、日本の中学校に編入することができません。

また、Junior High School を卒業していないため、中学の卒業資格が認められず、日本の高校の入学試験を受ける資格もありません。Junior High School を卒業していたとしても、日本語が全くできない状況の生徒を受け入れる高校は無いに等しいです。

日本に来たばかりで学校に通うこともできない若者たちが、日本語を学びながら高校進学や資格取得を目指す等、日本での進路について夢や希望を見いだせる場となるよう、お祈りいただけると幸いです。

主事　谷　景子

年長 以上 の子どもたち のクラス は、
週に 1回習字 の授業 があります

クリスマス会　劇「スイミー　」
天上に は、子どもたちが 手作りした 、フィリピンの
「パロル 」が飾ってあります

「トルコ・シリア地震」緊急支援献金送金のお知らせ

２月６日に起きた「トルコ・シリア地震」は両国にわたって大きな被害を引き起こしました。感謝箱献金事務局と役員会では緊急支援献金について協議致しました結果、感謝箱献金の**災害被災者支援積立金**よりの緊急支援献金を献げする事を全員が賛同致し、振り込みました。

支援金　50 万円

振込先　管区事務所　支援金は管区で取りまとめてくださるそうです。　　2023/2/14

コア チャプレン から　メッセージ

司祭　アントニオ　出口崇（京都教区　下鴨基督教会）

神学生のころ、荷物整理の一環で、使われなくなった大量の聖書を処分しました。聖書を捨てる、処分することに、多少うしろめたさを感じながら作業していると、たまたま先輩の聖職が通りかかり、「ほー、もう全部内容覚えたんやなー、理解したんやなー」とさんざん嫌味を言われた後、「まあ、役割を終えたんやなー」と、手伝いもせずに出ていかれました。

「役割を終える」その後の牧師としての生活の中で、何かの活動を終えるとき、自分の思い通りにならない出来事に直面した時などに、この言葉を思い出し、自分自身の気持ちに折り合いをつけることもあれば、「言い訳」にしていることもあります。

本紙には今回も様々な活動をされている団体からの、生き生きとした近況報告をしていただいています。それぞれの行っている活動の意義、「今、この人たちと共に」という、活動を始めた当初の動機、熱い思いを常に持ち続けておられることが感じられ、その活動をサポートする私たちの心も動かされます。おそらく様々な存続の危機にあいながらも、今現在続ける決断を繰り返しておられるのでしょう。

私たちの周りはどうでしょうか。私たちが関わっている団体、グループで、「なぜ、いま、まだ、こんなことしているのだろう」と感じることはありませんか。教会や教会の中での様々な活動もどうでしょう。その昔は確かに必要なことで、熱意のある人達とともに活動していたが、今ではよくわからない。今のメンバーでは活動していく余裕がない。けど、やめる決断ができない。考えれば不安なことだらけです。

無理していませんか。ひょっとしたら「役割を終えた」活動なのかもしれません。「だれかのため」の「だれか」の顔が見えなくなったら、考え時なのかもしれません。

その中で新たな「だれか」と出会うかもしれません。

皆様の毎日のお働きのうえに、神様の祝福がありますように。

感謝箱献金の祈り

神さま、

今日もみ恵みの中で生かされていることを感謝いたします。

イエスさまはいつも、悲しんでいる人、苦しんでいる人と共に歩まれました。私たちにもそのイエスさまの歩みに倣（なら）う心をお与えください。

私たちのこの献げものが、最も助けを必要としている人々のために用いられますように。

また、この人々との交わりを通して共に生きる者とならせてください。主イエス・キリストのみ名によって

アーメン

（2006 年 6 月日本聖公会婦人会第 21(定期)総会後第 2 回常議員会にて制定）

感謝箱とわたし

聖職候補生　　聖公会神学院　3 年
セバスチャン 染谷孝章

プロフィール
出身：神奈川県横浜市
出身教会：横浜山手聖公会
経歴：学生時代は BSA で施設を巡り労働奉仕。
装置メーカーの営業職に 30 余年勤め、聖職志願し
早期定年退職後、聖公会神学院に。
趣味：旅をすること。見知らぬ土地を訪れるときのワクワク感がたまりません。若い頃は西欧の統一の取れた街並みに惹かれていましたが、仕事で海外もよく訪ねるうちに、東洋の雑然とした街並みも受け入れられるようになってきました。今は普段街を歩くのも旅のうちです。

同僚を通じてある司祭様から「本を買うのが学生の仕事」と聞かされ、授業で先生から紹介された本を臆せず手に入れてきました。これも日聖婦を通して皆様から支えられている尊い献金が後押ししていただいた賜物です。この場をお借りして改めて深く感謝申し上げます。

この原稿を依頼いただき、支援先のことを少しでも身近に感じようと、改めて過去 5 年分の「ガリラヤのほとり」を丁寧に読ませて頂きました。

神学校で得た学びの一つに、「逆さまのリアリティ」ということがあります。ある先生がある司祭から聞いた言葉だそうです。わたしは学生時代に惹き付けられるように労働奉仕のクラブに入り、施設を周り、ワークキャンプを張って夢中になって汗を流してきました。教会活動でも教区の社会委員会で各施設を巡ってきましたが、何かそこに引力を感じてきました。それは一体なんなのだろうとずっと考えてきたのですが、「逆さまのリアリティ」という言葉を聞いて腑に落ちた思いがあります。聖書には主イエスが、人間の考えにより形作られてきたこの世にお降りになり、ご自分をむなしくして十字架につけられ、３日目にご復活される道行が記されていますが、公生涯のうちに弟子たちに伝え、集まってくる大勢の群衆に諭され、彼らを惹きつけてきたのはこの「逆さまのリアリティ」なのではないでしょうか。

この現実（リアル）の世界に今生かされているわたしたちは、神様の絶えることのない恵みのうちにあって、その恵みに応えていかなければならない責任があります。現実に向き合い、社会の必要に応えて行くこと、生活の中で具体的に証して行くことをかたちにしてきた感謝箱献金のお働きに改めて敬意を表します。

「ガリラヤのほとり」のバックナンバーは、婦人会ホームページからご覧いただけます。

http://www.nskk.org/fujinkai/

編集後記

主の平和がありますように。
「トルコ・シリア地震」は被災地域が広く、複雑な政情のために、特に内戦下にあるシリアは、避難民が多く住む地域であり、深刻な状況です。寒さや感染症も心配です。
感謝箱献金が最も助けを必要としている人々のために用いられますように。

日本聖公会婦人会感謝箱献金事務局
〒520-2331　滋賀県野洲市小篠原 847-6
TEL/FAX 077-599-3728（井田宅）
E-mail kansyabako@gmail.com